

### III. 全学教育シンポジウム

「2040年に向けた京都大学の教育のグランドデザイン」



#### 概要

9月20日、桂キャンパス・船井哲良記念講堂を会場とし、教職員232名の参加を得て、第23回全学教育シンポジウム「2040年に向けた京都大学の教育のグランドデザイン」を開催しました。

本学では、1996年以来、毎年、全学教育シンポジウムを開催し、教養・共通教育や大学評価など、様々な教育課題を取り上げてきました。今年度のテーマは、2018年11月に中央教育審議会より出された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」を意識したものです。本答申では、「2040年の展望と高等教育が目指すべき姿—学修者本位の教育への転換—」、「教育研究体制—多様性と柔軟性の確保—」、「教育の質の保証と情報公表—「学び」の質保証の再構築—」、「18歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地

域配置—あらゆる世代が学ぶ「知の基盤」—」、「各高等教育機関の役割等—多様な機関による多様な教育の提供—」、「高等教育を支える投資—コストの可視化とあらゆるセクターからの支援の拡充—」などが主要なテーマとして掲げられており、今後の我が国の高等教育政策や大学をはじめとする各高等教育機関における改革の取り組みの方向性や目的が謳われています。

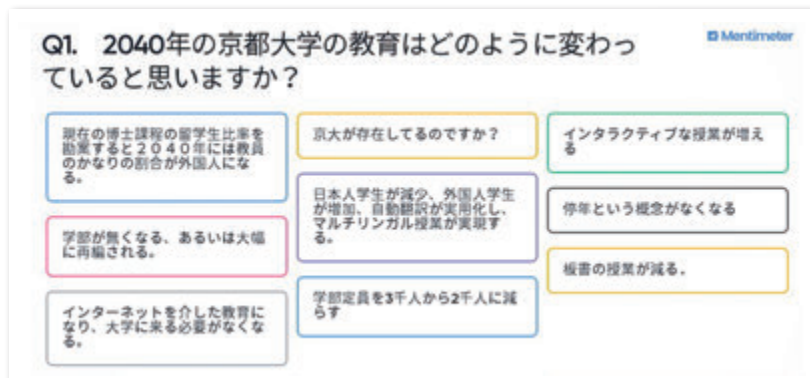
そこで、今年度の本シンポジウムでは、「2040年に向けた京都大学の教育のグランドデザイン」と題し、本答申における提言を「是々非々」の立場から捉えることにしました。それを通じて、京都大学の教育の将来像や今後本学で自主的・自発的に進めるべき教育改革・改善の方向性や目的等について議論することをめざしました。

#### プログラム

午前の部では、本学を取り巻く教育改革の現状や方向性に関する北野正雄教育担当理事・副学長の基調講演「京都大学の教育改革の今とこれから」に続いて、グランドデザイン答申でも課題の一つとされている国際化というテーマを取り上げ、本学の国際化の取り組み(国際戦略本部、ASEAN拠点、Kyoto iUP)について、それぞれのリーダーをお招きし、現状と今後の課題についてご報告いただきました。

午後の部は、日本学術会議会長でもある山極壽一総長による基調講演「学術の展望と京都大学の未来」から始まりました。続いて「2040年の社会と高等教育・大学を展望する」というテーマの下で、

広井良典こころの未来研究センター副センター長より「AIを活用した政策提言と高等教育の未来」と題する講演が行われました。さらに、このテーマについて、フロアの参加者にグループディスカッションを行っていただき、双方向プレゼンアプリを使って全体で共有しました。最後に、2040年をみすえた京都大学の教育の将来展望について、4名の方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。フロアの意見に対するレスポンスもまじえながら、活発な意見交換がなされました。



テーマ2(フロアとのやりとり)

## 参加者の声

参加者の感想・意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました(有効回答数69件、回収率29.7%)。まず、「今回のシンポジウムが教育改善に役立ったか」では、「役に立った」(57名)が「役に立たなかった」(7名)を大きく上回り、全体として高評価を得ることができました。

興味深かったプログラムでは、基調講演1の「京都大学の教育改革の今とこれから」(26名)が最も多く挙げられ、テーマ2「2040年の社会と高等教育・大学を展望する」(25名)、基調講演2「学術の展望と京都大学の未来」(23名)がほぼ同数で続きました(図1)。また興味深かった点に関しては以下のようなコメントがありました。「昨年もそう感じましたが、とてもよく大きな枠組みの話をもとめられていて大変参考になりました」(基調講演1)、「留学生が日本人学生と交流する上で『留学生』以外の属性を付与して上げる仕組みが重要だと思った」(テーマ1)、「二元論におさまらない対話とフィールドワークの重要性」「『グローバル人材とは』の最後の『他者を感動させる能力を持つ』に感動」(基調講演2)、「大変興味深い内容で、資料を探して読んでみようと思います。京大の将来についても同様にAIでの解析をお願いしたいです」「後半のディスカッション。意見が結構共通していて、京大で働いていることを実感した」(テーマ2)、「税金で運営されている国立大学に自由はどこまで保障されるのか、という根本的な疑問に対する答えが欲しい」「非常に面白かったので、次回はパネルディスカッションにももっと時間を割いてほしい。そうすればテーマ2で出た意見ももっと反映できるのでは。また、パネルディスカッションには若手、中堅教員も入れるといいのでは」(テーマ3)といった声が聞かれ、プログラムは概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップを企画した場合、参加したいと思うテーマでは、「世界の研究大学の教育改革」(23名)、「学生の学びと成長」(12名)、「入試改革(新テスト、特色入試など)」(11名)などが多く挙げられており、京大と同様の研究大学における教育改革への関心が際だっていました。

現在の課題や今後に向けてのアイデアについての自由記述では、次のような多様な声がありました。「京大という最高の研究型大学が、『最高の研究こそ最高の教育』という信念にならないのはなぜだろうか？ 研究力を疲弊させながら教育改革をするのではなく、研究力が教育を牽引するという構図を作るほうが京大に合っていると考えている」、「留学生の受け入れや特色入試に際して入口に関してはより柔軟で良いと思う。学生にもより多様性が生まれて良い。一方で出口に関してはしっかりした管理をするべき。卒業生のクオリティをしっかり担保することで大学としてのブランド力醸成もできるだろう」、「国際化のためには、教員にとっても職員にとっても、たいへん手がかかる現実があります。専門性を備えた職員の配置というのは、小さな部局にとって夢の夢で教員も職員も定割に苦しみ、プロジェクト経費をかき集めて、短期の非常勤さん頼りで目の前の課題を乗りきっている毎日です」、「多くの教職員の方々が、はんざつな事務、会議、評価作業につかわれている」、「修士課程、博士後期課程学生の充足率と質の低下。学際研究を掲げているが、学生の関心は自分たちの周辺に留まり、他研究科の話の聞いたり、共同研究に参加することが少ない」などです。

研究力を維持しながらいかに教育の質向上を進めるか、部局を越えた取組をどう活性化していくか、事務・会議・評価作業の効率化をどう図るかは、テーマ2のディスカッションでも多く出された課題でした。

このように、本シンポジウムは、京都大学の教育改革の方向性について、また京都大学の存在感をどのように高めてそれをどう発信していくかなどについて、ともに議論する機会を提供できなかったのではないかと考えられます。

当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

全学教育シンポジウム:

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>



### III. 全学教育シンポジウム

**プログラム** [司会進行: 田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授]

#### 午前の部

10:00～ **開会挨拶・基調講演 1: 「京都大学の教育改革の今とこれから」**

北野 正雄 教育担当理事・副学長

10:35～ **テーマ1: 「京大の教育の国際化を巡る現状と今後の課題」** (報告・パネルディスカッション)

《モデレーター》

松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授

《報告者・パネリスト》

「近年の実績とこれからの20年に向けての課題」

河野 泰之 国際戦略担当副学長・国際戦略本部長

「ASEAN地域を中心とした国際教育の進展」

縄田 栄治 ASEAN拠点長・農学研究科教授

「Kyoto iUP: Kyoto University International Undergraduate Program

長谷部 伸治 国際高等教育院 吉田カレッジオフィス副室長・特定教授



12:05～ 昼食・休憩

#### 午後の部

13:00～ **基調講演 2: 「学術の展望と京都大学の未来」**

山極 壽一 総長

13:35～ **テーマ2: 「2040年の社会と高等教育・大学を展望する」** (報告・ディスカッション)

《モデレーター》

山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授

《報告者・パネリスト》

「AIを活用した政策提言と高等教育の未来」

広井 良典 こころの未来研究センター 副センター長・教授



15:10～ 休憩

15:25～ **テーマ3: 「京都大学の教育の将来展望2040」** (パネルディスカッション)

《モデレーター》

飯吉 透 教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授

《パネリスト》

山極 壽一 総長

北野 正雄 教育担当理事・副学長

宮川 恒 国際高等教育院長

広井 良典 こころの未来研究センター 副センター長・教授



16:55～ 閉会挨拶

17:00～ 終了

17:15～ 情報交換会 カフェ「Arte」

